武家名目抄稿

職名部附録四

四

和書門
類 二五二〇六
號 七七
函 一一
架
冊 四五六

内閣文庫
和書
類 二五二〇六
號 四四六
冊 一五三
函 一一
架

内閣文庫
番號 和 25206
冊數 457 (66)
函號 153 275

77
11

武家名目抄稿第四冊

職名部附録四目録

晝番　時番
夜番　不寢番
夜行番　廻番
夜廻　供番
押番　詰番
張番　副番
入番　カクシ番
墓目番

国立公文書館
National Archives of Japan

武家名目抄稿第四冊

職名部附録四

畫番

吾妻鏡云寛元四年十二月廿八日癸丑今日追入之者逃参幕府臺所敵人追付之内参入于時松田弥三郎常基晝夜祗候之間両方共搦取之仍上下騷動云々

又云文應元年正月廿日戊子今日於御所中被定置畫番衆其内於壯士者歌道蹴鞠管絃右筆弓馬郢曲以下都以堪一藝之輩於時依可有御

要被定結番定去比御要之時無人之間殊以此
御沙汰出来仍仰小侍況於藝能輩目六度々被
仰合相州禪門治定云々六番毎番十三人今略之
又云弘長元年五月十三日甲戌今日晝番之間
於廣御所佐々木壹岐前司泰綱与渋谷太郎左
衛門尉武重及口論是泰綱以武重有称為大名
之由事武重咎之云已亘嘲哢之詞也
太平記云先帝船上臨幸条柳今如斯天下ノ乱ルヽ事
ハ偏ニ先帝ノ宸襟ヨリ事興レリ若逆徒ト差
チカフテ奪取奉ントスル事モコソモアレ相
搆テ能々警固仕ヘシト隠岐判官カ方ヘ被下
知ケレハ判官近国ノ地頭御家人ヲ催シテ日
番夜廻番隙モナク宮門ヲ閉テ警固シ奉ル
新撰應仁記云義就政長去程ニ花御所ヘハ細
川方ヨリ寄来ルト日番夜廻隙モナシ細川方
ニハ御所ヨリ打テ向ト面々ニ手分ヲス勝元
ノ方ヘ馳集ル
此随身ニ上記云永正九年四月卅日蜜蕩ヨ祇
伝ひ内閣ゐく李部也ゆ絲のゆ禮永よ
一中之

又云永正九年六月八日八幡一社社家未刻より出仕いたされ候間此の御縁ありて御馬も不残牽立候其人は供五騎計り細川右馬頭殿畠山二郎殿畠山宮内大輔殿畠山式部少輔殿杉孫以上御出前に五ケ番にて立換如本番祇候中より御両所仰出候云々

時番

氏郷記云（氏郷逝去條）曽根内匠カ子息曽根孫四郎ハ此比マテ父ノ養育ナレハ察ル恩賞ハ無ケレ共親ノ跡ヲ直クニ被下タリシ事忝キ次第也ト常々思ケレハ此度追腹ヲ切ントス追腹ノ事天下ヨリ御法度堅ク被仰付シカハ家中ノ年寄共孫次郎カ刀脇指ヲ奪取テ座シキ篭ヘ追入番ノ者ヲ付テ置タリアルヲ見時番ノ者共油断シケレハ彼カ脇指ヲ抜テ腹ヘ突立ケルヲ見付飛懸リテ脇指ヲ奪取ケリ

夜番

太平記云（大森彦七條）諸人空ヲ見上タルハ庭ナル鞠ノ懸ニ眉太ニ作金黒ナル女ノ首面四五尺モ有テント覚タルカ乱レ髪ヲ振挙テ目モア

ヤニ打笑テハツカシヤトテ後ロ向キケル是ヲ見人アツト呦テ同時ニソ皆倒卧ケル加様ノ化物ハ墓目ノ聲ニ恐ルナリトテ毎夜番衆ヲ居テ宿直墓目ヲ射サセケレハ虚空ニトツト笑聲毎度ニ天ヲ響シケリ

今川記云其頃堀越殿二人ノ若君御座兄ハ先腹ニテ茶々丸殿ト申十五歳ニ成弟ハ御児ト

テ十一ニ成當腹也然ルニ御臺所二男ノ若君ニ御代ヲ継セ奉ラントノ義ニテ兄ノ若君ハ乱氣ニ御座ト種々父ヘ讒言アリテ終ニ獄屋ニ入置被申御内ノ人々憐申密々獄中ヘ小刀ヲ一本参ラセケル若君小刀ニテ夜番衆ノ喉ヲ切テ番衆ノ太刀ヲ奪ヒ取御父ノ方ヘ走入継母御前ヲ初トシテ讒言申タル女共ヲ数多殺シ其後御内衆数名合力申父堀越殿ヲ攻被申シカハ政知ノ御所五十七歳ニテ御自害アリ

應仁乱消息云大剛若衆樣後陣能ク可有ハ用心供迫手搦手先陣後陣扨話敵夜番番之怨虜ヲ捕搦搦被申ク

北条五代記云庭林房一卒年条　房州里見義堯と北条
小条氏政与矢乃時節房州と北條の領近き故
房州海賊小舟二艘三艘宛関東より北條の浦
里へ毎夜ごとに来て浦々の里民驚し夜の明さ
ぬ内に海を見ふさぐ浦里に取寄せ鉄砲数
多打放ち鬨を吹鳴を立て退散
大閤記云織田信長酒造亟条　酒造亟此表は立て如武事
ならば武士と云事倫理第一と想軍中に
恙なうに仏神賦り祈りしも文に聞よきに或
他の坂寄他し遠見ちにも自ら歩士共相

添想軍城已櫛の如きに力根に労を形を
又云信中国冠城五日六日乃間に水いつちの
ごとくに潮ちて見くさまり十日比より
常畢く付まり所々人の住居ある堤の
上には柵付付廻し下には町屋作りに小屋共
小路〻〻共屋つくり作りへ数寄興寄絶百
姓毛利家より密通ある男系統
又云因幡国取合斯て漢川は毎物共乱
杭を打て四方に城城城城城城城廻し十町
〻〻に三階〻矢〻を立騎馬〻武士廿人宛

竟し射手百人鉄炮百挺つ〻籠置五町〻〻に
當所を作り當士五六十人侍〻入替〻〻被當
廻當蠟之熊野衆を出而むく隙透有も取く之
たゝ〻し
又云 細川系 天正九年六月廿五日羽柴筑前守秀吉
の數多之軍兵被率し揚於姫路を打立因幡
國ゑ〻而〻一字城不殘令放火於〻廿六日而
被軍評定し御手ゟハ先遠巻に陣城を構ゑ攻
と也ゟ城ハ二十町余城陽之於城を構へ塀櫓
當處等まゝ嚴く囲ひあし夜當番當透有もな

すまけり當之於松原七郎左衛門尉を入置於城
二ヶ所之新城と取る〻の間城を切通路ある〻
まりかは於城も於城も事おにゑよありけるを
中略 海上城兄まハ松井猪介荒木勘十郎船大將
として當船を數隻不知様補之外にハ家は
幕を張櫓城上登被の當かゝく勤めのハ島の
おこのまふ物ハ形し
又云 山中康勝伝系 永禄五年七月 長月比被當の侍共〻に杖宅ゟ本
ある人に山中云處りハ氏姓に因て名城うくて
人やとおもしかハ尤道しかくへとゝく山中康助

秋宅庵ニ而与奉陽ニ而ハ名京ニ心

當代記云慶長十二年二月廿九日大御所江戸
ヲ御立鷹野逼留シ玉フ處ニ金ノ茶具釜天目
水指柄杓同柄杓置茶酌以下悉紛失是近習ノ
輩ノ仕業トテ供ノ衆上下其夜ノ泊所々ノ宿
ヲ被改ト云ヒ分明ノ儀無之其夜番衆饗場勝
七落合長作岡部藤十郎是三人ヲ方々城ヘ被
預勝七ハ掛川長作ハ田中藤十郎ハ沼津也

不寢番

世鏡抄云亭主身上之事夫亭主トハ一切在家
出家不可恨乍去第一侍ノ家主之支欲朝ニハ
速ク起テ若黨冠者郎従已下徘徊ヲ見テ座敷
ノ壁ヲ打拂テ兵具ノ槍タルヲ直シ弓ヲ放ッ
ヘシ楯ヲ伏ヨ馬ノ氣足音ヲ聞キ近里ノ様ヲ
見送リ遠山ノ雲ヲ詠メ口々ノ城戸ノ躰ヲ見
犬ノ卧処能々見廻テ例ノ如クナラハモトヨ
リ珍敷事アラハ依其躰相計之用心ヲシ成敗
ヲ致セ晝ハ家ノ子又ハ若黨ニ詞情ヲ懸ケ出
入ノ貴賤来臨ノ客僧俗共ニ早晩モノ事ト思
ワスシテ始テ来ト心得テ能々是ヲ賞翫シテ

何事モ實アリテ花アル詰ヲイヒ互ニセヨ分々
長々ニ順テ勿惜費ヲ夜ハ戌ヨリ亥迄ハ想番
子ヨリハ次番ヲ至ヒ卯ヨリ想番ナリサレハ
三時ノ番ト云也故文曰侍人ノ三時番ハ碎骨
抽忠勤僧ノ六時ノ勤行ハ碎肝備香花ト云ヘ
リ如此次第ハ亥ノ時マテハ人毎ニ男女寢サ
ル時ナレハ想番也去ハ人數ニ隨テ一度ツヽ
可廻也子丑寅ハ卧時ナレハ寢スノ番ナラテ
ハ充用心也卯ノ刻ニナレハ人々驚ニ依テ敵
モ五更ノ夜ハカリナトニテ卯時ニナレハ俄

ニ起出テタルハ勇士モ路ニ迷ヒ武人モ具足
ニ迷フ兼テヨリ起出テ五更ノ温泉ヲ服シタ
レハ肝臆ノ本座ニ帰テ心中居ル故ニ充越度
也
續武家閑談云權現様ハ陣中近習ニ不寢番
ハ可ル作付思召ス或様ハ意ヨ今様ヲ方ニ
ヲ鉄砲ヲ沙汰ス少キ様ヤヽ作ル間ハ
ヲ恥シメ給フヨ自然ニ寢ヲ番上意ハ
作ヽヽヽ出来ル

夜行番

吾妻鏡云文治四年五月廿日丙辰八田右衛門尉朝家郎従庄司太郎被遣大内夜行番之処懈怠之由依令風聞早可召進其身於使廳云々

又云兼元四年六月十三日巳駿河國以西海道驛家等結番夜行番衆殊可致旅人警固將又丹後局参向之時被盗取、財宝等可尋出之由今日被仰守護人云々

廻番

信長記云大河内城没落条 柵際ノ廻番ニハ菅屋九右衛門中川八郎右衛門木下雅樂助松岡九郎次郎生駒平左衛門河尻与兵衛尉湯浅甚助村井新四郎中川金右衛門佐久間弥太郎毛利新助同河内守生駒庄助神戸加助荒川新八猪子加助野々村主水正山田弥太郎滝川彦右衛門尉彼等打替々々見廻ル云々

大閤記云高松城堤の上ハ柵付廻シ下ハ町屋作事に小屋ヲ作小路ヲ城や様ニ作ル毛利家より

[illegible]

うに添て十町ヨリ一ケ所ヲ要害を極へ大将
小将を入置二六時中備番もしやの地形に備
候事なれとも
又云 因幡國ヲ当 斯て淀川ハ水橋に掛乱杭
蔭様ニ条
を振り四方に堀に堀ほり廉堀に結廻て十町ニ
ニに三階ニ矢倉に立騎馬ニ武士卅人宛竟し
射手百人鉄炮百挺つ篭置五町ニニに番所
を作て番士五六十人宛入替ニニ拵番廻番儀
の態聖系ニ寄ほめ隙透百もあくべくニ
百本陣の種時に告迄大将陣の太鼓櫓ニの

小方鼓一所に打出ニかまけ寄ニ寄ニの廻
番数ニ付挑灯松明ハ一ケ所光乃新明ニ分れた
堀中もしかの侍も新ニ鉄ニ藝ニ付も中ニ
思ひ切ニ寄ニ寄ほ
又云 小四京 卯月二日 四方の攻口に付さくめ
堀ニ条
ほ明ニ寄ほ寄ほと引巻付ニ鉄付く責鉄を
ほ寄ほ弓鉄炮を射入ニ入鉄波地を鉄ニ寄ほ
入ハ火矢に四方ニ射入鉄炮に長角ニ寄ほ
ニ初ニほに寄ほ寄ほ方ニ寄ほ細む
寄ハ堀中ニ寄ほ寄ほ思ひ寄ほ寄ほ返

[illegible]時代今[illegible]多勢[illegible]ものさみ
し[illegible]毎日持[illegible]つきよせはきよせ
攻寄五月中旬より頃ハ[illegible]崖より[illegible]と[illegible]物語
[illegible]事なきれは城中群疑蜂起し[illegible]
[illegible]の廻[illegible]
ハ桃地乃光茂地乃[illegible]に五月闇と名付[illegible]
城中の上下[illegible]
松原自休手録云佐崎ノ近所ニ出張ノ火ノ手
ヲ待給フ處ニ其夜太田一族寺内ノ廻リ番ニ
テ被見付之両人トモニ被討取

夜廻

源平盛衰記云墨俣河合戦条平家ノ方ニハ源氏夜討
ニモコソ寄スレトテ夜廻ヲ始メテ十騎廿騎
ハカリ手々ニ續松捧テ河ノ耳ヲ見廻ケルニ
岸ノ下ニ馬ヲ引立テ其傍ニ人一人立タリ夜
行是ヲ見咎テ何者ソト問ニ義圓チトモ騏カ
ス是ハ御方ノ者テ候カ馬ノ足冷シ候ト答フ
御方ナラハ甲ヲ按テ名乗ト云ケレハ馬ニヒ
タト乗テ陸ヘ打上リ兵衛佐頼朝ノ弟ニ卿房
義圓ト云者也ト名乗テ夜廻ノ中ヘ打入テ竪

横ニ散々ニ戦ヒ三騎打取テ二人ニ手負セテ
義圓コヽニテ被打ニケリ
吾妻鏡云文治三年十月八日乙亥下河邊庄司
行平千葉介常胤自京都帰参於院宣等者先々
付雑色進上畢云々爰両人被召御前上洛之間
京中静謐之由及叡感尤為御眉目之趣所被感
仰也而行平九月十一日入洛即夜窺兼義及群
盗衆會之所々令即従致夜行之處於尊勝寺邊
行逢奇怪之者人数八人不残分捕取之云々
又云弘長元年五月一日壬戌夜半大倉稲荷邊
聊物忿彼社檀此間連々有會合之輩今夜々行
衆恠之欲捕取之故也悉逃散云々
太平記云陶山小見山夜討条九月晦日ノ事ナレハ日指
トモ不知暗キ夜ニ雨風烈ク吹テ面ヲ可向様
モ無リケルニ五十余人ノ者トモ太刀ヲ背ニ
負刀ヲ後ニ差テ城ノ北ニ當タル石壁ノ数百丈
聳テ鳥モ翔リ難キ所ヨリ登ケル二町計ハ兎
角メ登ツ其上ニ一段高所アリ屏風ヲ立タル
如クナル岩石重テ古松枝ヲ垂蒼苔露滑ナリ
此ニ至テ人皆如何トモスヘキ様ナクシテ逃

ニ向上テ立タリケル處ニ陶山藤三岩ノ上ヲ
サラ〳〵ト走リ上テ件ノ差縄ヲ上ナル木ノ
枝ニ打懸テ岩ノ上ヨリオロシタルニ跡ナル
兵共各是ニ取付テ第一ノ難所ヲハ安々ト登
リテケリ其ヨリ上ニハサマテノ嶮岨無リケ
レハ或ハ葛ノ根ニ取付或ハ苔ノ上ヲ爪立テ
二時計ニ辛苦シテ屏ノ際マテ著テケリ此ニ
テ一念ヲ各屏ヲ上リ越夜廻リノ通リケル
跡ニ付テ先城ノ中ノ案内ヲソ見タリケル
和田さかもの語雙紙云ふ後兄弟(祐成時宗)形ばか

門の中ハよりる事こそ明られ見ゑ
應仁記云(義就政長闘乱之条)勝元曽テ兼伏イタサス御
返事ヲハ自是可言上ト御使ヲハ被帰ケリ去
程ニ花御所ヘハ細川方ヨリ寄来ルト日番夜
廻隙モナシ云々
備前文明乱記云松田勢一手ニ成テ福岡ノ西
ヨリ北ノ山ニ陣取備後ノ勢同南津坂ノ上火
鉢カ城ニ陣取大方三方大山五六十九モ陣取

續大幕ヲ打廻シタル陣々ノ在様タトヘン古
モナシ（中略）然ル処ニ十一月廿三夜大風木ヲ打
テ吹ケル間定テ忍ヒ夜打ナントモ可有トテ
宿直夜廻ヲ構番キヒシケルニ云々
大友記云竜造寺山城守謀判之条今度筑後表発向ノ企モ
各々不限忠節ノ輩カ恩ノタメ也トイヒ聞セ
イカニモ事ナキ躰ニモテナサレケレトモタ
ハカリテノ矢フミナラハ余人ノ持口コソ射
ヘキニ則古飯カモトヘノ矢文ハ古飯カ役所
ヘ射ケルハ偽ニテハ有間シキ折節夜廻リ衆
見付候ヘハコソシレ候ヘナトヽ云族多隆信
モサナカラ心元無ヤ思ヒ給ヒケン降参ヲコ
ヒテ質人ニ竜造寺豊前守ヲ出ス云々
大友與廢記云杉尾山廣橋もとゝ山すくゝ
えゝ東ハ谷ふかゝ奇石そはゝたちはめゝうふ
くゝ多るゝてハこのけ里ゝ西ゝはゝゝ小ハ峯
はたこゝ杉のえ里ゝとちてあの川ゝ楯城
るゝゝ姫るめゝはゝ志ゝ志ゝ城中書家久ゝ
ひ根成と定め尾崎ゝ崎ゝ矢倉をあけ当城す
毎ゝ聽ゝまゝりひまゝ用心稠きゝゝ

関八州古戦録云（廳南勢上総万喜城責條）土岐カ夜回ノ者
是ヲ見付テ城中ニ告タリシカハスハ事出来
タリトテ閉メキアヘル事限ナシ夜モ隼明方
近カリケレハ頼春入道々鉄矢倉エ騰テ川向
ヲ見ルニ持楯械楯突キ雙テ既ニ城門エ押詰
タリ

奥羽永慶軍記云（鮭登落城之条）カミリケル所ニ清水
ノ傳矢口讃岐ト云者鮭登ノ城近ク夜廻リニ
出ケルカ城中ヨリ大勢水汲ニ出讃岐カ郎等
トモ是ヲ見テ城中ニ水ナケレハコソ水ヲハ
汲ナリ此雑人等ヲ討取ナハ軍兵水ニ渇シテ
忽落城スヘシト云マヽニ讃岐カ手ノ者七十
人押寄水ヲ汲雑人ハラ十四五人ソ切捨タル
云々

又云最上家ノ旋一陣屋夜廻輩装束預有異相
定者可問其由答不分明則可討留事

上杉憲實記云（永享十二年）関八州ハ中ニ不及北國出羽奥
州ノ軍兵夜ヲ日ニツイテ下野ノ國ヘ馳来ル
其勢十万余騎結城ノ城ヲ十重廿重ニ取巻ク
如何成鉄廓銀城成トモ此大軍ヲ可防トハ不

見会トモ此城ハ前ニ大河有後ニ大堀有テ大
船ヲ浮ヘ鳥ナラテハ難通楯籠人ハ宗徒ノ侍
五百余騎役所々々ヲ請取日番夜廻リ其透ナ
カリケレハ寄手大勢成トイヘトモ攻寄スヘ
キ様モナク唯大手ニ向テ矢軍計ニテ日ヲ送
ル

増補筒井家記云カクテ光秀早馬ヲ以毛利家
ヘ注進ス彼使六月三日深更ニ備中國高松ニ
着暗キ夜ナレハ過テ秀吉ノ陣場ノ辺ヲ行過
ルヲ夜廻リ者アヤシミ搦捕拷問シケレハ懐

中ニ一ノ文箱在リ秀吉有披見大ニ驚玉ヒ則
彼者ノ首ヲ刎ラル

武蔭叢話云松倉長門守勝家領分肥前島原一
揆の時二月廿一日の夜城より馬田左衛門佐
忠之使へ物討よ出る其夜の夜廻番ハ松平伊
豆守家人岩上角助と尼子八郎兵衛紀伊國
ハ使番山中伝右衛門ハ夜廻番の雑人共ハ
寄る〻岩上尼子山中ハ立うちへ逃去り
柵際へ走る伝山中伝右衛門一番に残る人を

供番

政所内評定記録云寛正七年正月廿六日内評定始若君様御産之間於春日亭被執行座上東也被改御直垂於御上下直京極御成御参候於路次被待申御成着到者還御之時可有御披露也依為御供番親春ニ渡候事

花営三代記云應永卅一年正月二日椀飯土岐二郎持益次第同前御方管領ヘ成御乗車中略御供事畠山中務少輔持清二日御番供始也大舘五郎持負両人ハ裏打也

長禄以来申次記云十二月卅日歳暮内巻数事ハ今日以前ハ無之ハ重ねて進上し儀も有し雑紙先ハ対面不しつきに有しも也必年日更云々中次ハ供書ハ不定ハ云々中ハ日同朋衆ハ歳暮乃ハ書数ハ無ハ大卅日ニ不ハ一度にの披露中ハ百箇度ハ不及中入ハ箱ハ重ハ中ハ自然の所ハ得ハ由中有也云々

毛利家記云隆景仰ハ備ハ勘解由殿左ヤウ被申候乎アハレ其分ハ調ヘ候ヘカシ輝元安堵

可仕儀ナリトノ御アイサツニテ雅楽殿帰リ
給フトヒトシク駕出タルトテ急ニ出サセ給
フ供番ノ衆殿何方ヘカ御候トツケ廻リニ
三町御跡ヨリヤウヽヽ追付申也
家中此馬記云冨打の次第は太刀は役ハ一番
あり常の出仕ならい二殿様ハ同長儀ハ
遠鄙あとの供よあまり無ハ毎月は出供
番ハ常は相よう無ハさ相の時ハ長儀ハ打
込あり
江城年録云寛永十三年九月廿一日尾張殿へ

押番

宗町殿日記云（諸方より祝儀を押を）依泉州表の押ハ福
島の城を普請し杉永主水正城入る淀の大
河よハ杉永主殿介狗稲荷の押へよハ杉永隼
西少路ハ氏西岡山上山城ハ山城敬の出口
よそれ等ハ押なり
松原自休手録云元亀三年十二月廿三日ノ朝
山城山崎ハ供番ハ書院番寺組ニ枝土佐
ハ小性ハ山居遠江ハ組ハ服部中ハ歩ハ
石谷ハ助神尾宮内少輔ハ供ハ番也

従濱松三方原ヘ足軽少々出ル其日ハ穴山押
番也
又云定テ信長二ノ合戦可有ト脇備ヲ先ヘク
リ出シ焼捨篝用本篝サレトモ敵不懸来翌廿
三日ノ朝従濱松三方原ヘ足軽少々出ル其日
ハ穴山押番也云々

誥番

吾妻鏡云建保元年二月二日癸酉昵近祗候人
中撰藝能之輩被誥番弓之学問所番各當番日者不去
御学問所令参候面々隨時御要又和漢古事可
語申之由云々武州被奉行之云々
又云仁治四年七月十七日壬辰臨時御出供奉
人事依不知其参否毎度相催之条且遅参基也引
且奉行人煩也兼令存知之聞御出期者不論晝
夜為令應御要可結番之旨被仰陸奥掃部助之
間以當時不祗候人数令結番之前大藏少輔行
方於小侍加清書所押臺所之上也又就在国等
雖不知此人数於時隨令参上可被召具之雖為
此衆若有数輩同時故障者可催加他番人之由
被仰出云々定御共結番事次第不同上旬前右馬権

頭遠江馬助遠江式部大夫足利大夫判官相模
右近大夫将監（下四十四人畧之）中旬武藏守備前守相
模式部大夫摂津前司佐渡前司（下四十四人畧之）下旬
丹後前司陸奥掃部助北条五郎兵衛尉若狭前
司越後掃部助（下四十四人畧之）右守結番次第可参勤
之状依仰所定如件寛元元年七月日
梅松論云隱岐國より おかみ申護人信濃去年は
妻より一族を法華ゝ法所城擊國ゝ申ふ
ふ佐ゝ木冨士名三郎左衛門尉と云者常に龍
顔を付奉り倫言に應ゝ給ふの天の授る人
ゝ やうに見ゆ此ゝ出ゝ申ふ
又云一色禪門仁木右馬助義大將ゝ三九州
に掌杉浦黨城先ゝ肥後の菊地へ發向ま
彼城を打ゝ散ゝに合戰ゝ ゝ 其日の内に責
落ま打ゝ ゝは九國の間に独る山法も打ゝ
ふ去程を少弘を ゝ 紫連ゝに系着
ゝ京都の事ゝも中ゝ れも昔陸奥守義
秀衡飛脚城法蔵ふ ゝ 洛中の事を守り打も
ヤ申ゝ ゝやゝゝ仰られゝ
又云楠伯耆守赤松以下山陽山陰南海ゝ ゝ 軍勢

恩を蒙る事傍輩を人とも思ひつゝ此度
に迄五歳七度八箇にあらず卿相はいく頭人
々を刺殺所と号し侍る中又侍
所と号し土佐守兼光太田大夫判官親光富
部大金人陸奥守時重等城中出る事
召むの時の武者所を集る新田の人々を
以て陸人の為に諸国を諸国受給
新式目云正応元年二月九日条 鎌倉諸国諸国事為諸人頼
基に由る事云々
幡川親元記云文明十三年辛丑山寺内供諸国

一国細太山治部大山宮大 十四 人畧之

張番

甲陽軍鑑云信州平沢大門 村上方乃家老佐大
殿下等合戦条 村上方乃家老佐大
物語評議して云今度の敵乃大将時信わか
けとゆ少人数といひ旁もつて油断強敵と云
て油断忘れ味方よりけり者も一人出され弥
更前の日も以る過る如ふり次日も物なり
少つゝ勇躍て敵来しかつまとなをしかし敵
はあうに処よ不意を晩とりかけ敵
甲陽軍鑑末書云信州平沢大門到下合戦ハ天

文十一年初三月九日ニ信州衆ヲクレヲトリ
テ后晴信ハ若大将少人数也篭城致サレシト
雖以テ油断ユヘ張番出サス目付ヲ差越サル
ニヨリ不意ニ曉取カケラレ備手配モナラス
終ニ敗軍シタリ（天正十一年四月）
太閤記云山路乃監物ハ共逃ケ味方乃勢
遂宿意条件ハ
カヽル事に太田平八池田仙右衛門尉ハ
五人四五人切ハ急ハ出会ハ
第至くはやとは張番の士少もあつて
鉄炮を以防戦ふ事に右の篭り要害より中川

瀬兵衛尉富山太近手勢ヲ引下て三人計
高き土手ハ堺ヲ不破ス之位ハ居久右衛門尉
の勢と揉に相ヲ防戦ハ
又云山中ハ城出丸の普請等ハ
ヲヽ攻破ラ様ヲ思ハ
条出防をよせ
ハ事ヲ
うちかれ
したる陣をいう
を知うへ
出丸ハ一町計有ヲ

墨ハ一面に張番に出る五六十人の鉄炮
の者ともいつ〳〵はおの〳〵引き入りまた
川く勢多陣所ちこのうち矢上のハ手を入へ出
張る鉄炮ともハ一度に打立時を同く
出る

氏郷記云（小田原軍条）其夜ノ張番関右兵衛佐ノ与
ノ者共ノミコソ陣ヲ張テ用心ヲハシテケレ

秀頼事記云備前島ノ東大和川ノ南ノ堤ヲハ
志岐野ト云北ノ堤ヲハ今福ト云此今福ノ堤
ヲ堀切リ大坂ヨリ矢野和泉ト云鉄炮頭一人
爰ヲ堅メタリ然佐竹カ先手ノ者共五六十人
アケクレノマキレ土堤ノ陰ヨリ忍寄矢野和
泉守張番ノ者七八人打捕テ軽々ト引退ケリ

奥羽永慶軍記云（稲庭川連梨落城条）文禄五年四月三廿九日ノ夜ハ沼
田ノ本丸ヲ打圍テ八方ニ陣篝ヲ焼テ張番ヲ
置鉄炮ヲ打セケレハ其音鳴止隙モナク鶏鳴
暁ヲ催セハ云〻

又云（大森合戦条）本海法師張番ノ足軽ニ向テ大将
大谷殿ノ御手ニ属シ候淵名殿小介川殿ニ見
参仕リ候ハント申セハ両人軈テ立出件ノ書

簡ヲ渡シケル

平塞録云寛永十四年十一月朔日爰ニ三角浦張番ノ士河喜多九太夫正重今夕郡浦近ク巡検シ一揆推寄ル様子ヲ聞三角ニ帰ラス直ニ郡ノ浦エ来ル中略九太夫則村継ニ相觸テ男女ノ百姓ヲ呼集メ近所ノ山々ニ上セ二三里ヵ間ニ遠篝ヲ焼セ亦切火縄ヲ四五尺程ニ用意シ竹ニ狭ミ人ニ持セ火縄不足所ニハ船ノ綱ヲ解テ四五尺斗ナイテ火縄トテ濱辺四五丁ノ間ニ立並ヘ篝ハ五六拾間ホトニ段々焼續ク云々

副番

三上記云永正九年三月十四日黒つき毛責ける中由何中は河京毛何とも責うやはいうけ出ける御中京仰せ出され中略出成まは普人見中間大京兆太馬場ニ於て上意也十三日板刷当ゝ祖候仕十四日鞍ハ馬責中は也間四月一日不中也仕二日三日不条三日ハ刷当ゝ祖候ハ歓乗人より不条刷当は中まりて三日不条ハ始也

入番

大友興廢記云筑後國は退治し給ふ草野の手勢三百肥前より乃入道五百人乃つゝんのたけの城より三里はなれたる所に不つまりに伏て豊後の先手をたゝき出よとゝ

カクシ番

里見九代記云入道是も様味方に仁替りの者ありと思ひかくし置をすく是他の和田法ゆゝより通るものゝ様ほれ〳〵かゝめとゝ法四五度に及ぶゝ

墓目番

平家物語云物怪都は福原へうつされて後平家の人〳〵夢見もあしう常ハ人さゝやき〳〵変化の者とも打ゆかりまり或は入乃部屋ひきゝ所に一間にたゝかゝ程なものゝ面出来て其記事ハ入乃ちつともまわかたつ多とにまつ〳〵おいしきれいなる消えて消失ぬ国乃ゆゝ所ハあ〳〵しく作られたりきれいなる大木ちんとも形うきゝ所〳〵或は大木乃傍ら青〳〵人あるい二三百人の姿〳〵虚空にとつと知ふ者〳〵けまぬ

何様ニ成れも天狗の所謂ト云沙汰ニ宣
五十人拾百人の為流を拵へ蟇目の為と名付
く蟇目を射させ是も天
源平盛衰記云福原恠入道ノ禿トテ髪ヲ肩ノ
マハリヨリ切タル童部ヲ三百人マテ召仕給
ケル中ニ天狗交リテ常ニ大木ヲ倒音シケレ
ハ夜六人晝六人ノ兵士ヲ居テ蟇目番トテ射
サセラル

武家名目抄稿第四冊

国立公文書館
National Archives of Japan